



URA (University Research Administrator) の果たすべき役割

原田 隆

大学に勤めている方は、最近、URA (University Research Administrator) という名刺をもった人と会う機会が増えたのではないのでしょうか。文部科学省によるとURAは「研究者の活動を支援するため、研究活動の企画や管理、研究成果の活用促進などを行う」専門人材と定義されています。URAの業務は、一般的に大きく三つに分けることができます。一つは競争的資金情報の収集・分析、プロジェクトの企画から設計、申請支援までを担う「プレアワード」業務です。近年、大型研究プロジェクトへの申請では学際的な体制が求められるようになりました。学内外でのチーム構築に伴う各種調整作業もプレアワードに含まれます。二つ目はプロジェクト採択後の研究費の適正な管理、コンプライアンス、および成果報告支援などを担う「ポストアワード」業務です。社会への説明責任および人材育成の観点から、近年重視されているアウトリーチ活動支援も担当します。三つ目は学長などの大学経営陣と一緒に研究戦略の立案などを行うシンクタンク機能です。このように、URAの業務は、研究開始時から社会に還元されるまで非常に広範にわたり、機関毎に業務内容、体制が異なります。

なぜURAという新しい職種が生まれたのでしょうか。背景には、大学に対する社会的期待と、教員の仕事の増大・多岐化による負担増に伴う研究力の低下があります。現在、大学には教育および研究に加え、イノベーション創出の場としての機能が求められています。ここ数十年、国が戦略的に重点化する研究分野に対し、研究費予算の一定の割合を優先的に配分する競争的資金が増加しているのもそのためです。競争的資金をいかに獲得していくか、学術的な研究成果だけではなく社会実装までつなげるにはどうすればいいのかが、大学にとって最優先課題の一つとなっています。また、公的資金による研究をする上で、大学組織として、適切な研究マネジメントに努め、かつ、研究の意義や成果、そして社会実装のプロセスに関して社会に説明していくことも求められています。しかし、我が国の大学などでは、研究開発内容について一定の理解を有しつつ、研究資金の調達・管理、知財の管理・活用などをマネジメントする人材が十分ではないため、研究者に研究以外の業務で過度の負担が生じている状況にあります。そこで、学術的知識や知財などの専門知識を有する専門職が必要となりました。

「これまでも産学官連携コーディネーターや関連部署・部署の事務職員にサポートしてもらっていた」と思われるかもしれません。産業界で活躍された経験をもつ産学官連携コーディネーターやNEDOプロなどの管理担当事

務の方々抜きに研究プロジェクトの推進および技術移転はあり得ません。しかし、それらの方々は、人事異動で別部署に異動したり、個々の研究プロジェクトや整備事業で雇用されるケースが多かったため、全学的な戦略に基づくサービスの提供が難しかったり、長期的な雇用の確保や経験から得られた知見の組織的蓄積が困難でした。また、教員と事務という2種類で職位が構成されている大学人事制度の中で、両者の間をつなぐハブ的な役割を担う人たちの身分は不明確になりがちであり、キャリアパスの形成という視点を持ちづらいと言われていました。大学の研究戦略は中長期的な視点からもなされるべきであり、個々の研究についても、アイデアの創出から社会実装までの期間、安定して質の高いサービスを提供していくためには3～5年という短期的な雇用や人事異動などが行われる体制での支援では限界があります。そのため安定した雇用および一貫して研究支援をおこなう研究支援専門人材としてURAが誕生しました。

政府が今年1月に公表した「『日本経済再生に向けた緊急経済対策』について」において、イノベーション基盤の強化」の項目にURAの配置およびキャリアパスの構築が盛り込まれていることから、URAへの期待の大きさをわかっていただけたと思います。URAはまだ黎明期にあります。短期的な成果を上げるには、すでに大型競争的研究資金を獲得しているスター教員の支援に注力することが近道かもしれません。しかし、大学全体の研究力向上のためには、未踏分野にチャレンジする教員やこれから研究者としてのキャリアを形成する若手教員の支援も精神的に行わなければなりません。チャレンジングな研究は成果が生まれるまで時間がかかり、論文などの成果発表も難しくなります。成果が顕在していない研究の目利きをどのように行っていくのか、学術的基盤を担う基礎研究や人文・社会科学系の研究をいかに支援していくかなど、URAにはさまざまな課題があります。URAはこれら山積する課題や「大学のあるべき姿」について、大学経営陣も含めた全教職員と共有し、状況に応じた支援メニューを開発するとともに、継続的支援を行うことが使命になります。

現状では、URAは学外だけではなく学内の知名度もそれほど高くはありません。個々の仕事に対する準備やプロセス、そして結果を通じて関係者に認めていただきながら、将来に向けた取り組みを合わせて行っていくことが、専門職としての基盤形成だと思っています。皆様には「厳しい」目で見守っていただきたく存じます。

